

夫婦善哉

織田作之助

青空文庫

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、
 醬油屋、油屋、八百屋、八百屋、鱒屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主
 その他、いずれも厳しい催促だつた。路地の入り口で牛蒡、蓮
 根、芋、三ツ葉、蒟蒻、蒟蒻、紅生姜、鯛、鱒など一銭天婦羅
 を揚げて商つている種吉は借金取の姿が見えたと、下向いてに
 わかに饅頭粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、
 はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待てしばしがなく、「よつしや、今
 揚げたアるぜ」というものの搦鉢の底をごしごしやるだけで、
 水漬の落ちたのも気付かなかつた。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女

房ぼうに掛かけ合あうと、女房のお辰たつは種吉しゅきちとは大分違ちがつて、借金取の動作どうさくに注意の目をくばった。催促みせの身振りみぶが余あつて腰掛こしけている板の間をちよつとでもたたくと、お辰はすかさず、「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それでよろしおまんのんか」と血相かえるのだつた。「そこは家の神様が宿つたはるとこだつせ」

芝居しばいのつもりだがそれでもやはり興奮おどろするのか、声なみだに泪がまじる位であるから、相手は驚おどろいて、「無茶いいなはんナ、何も私わてはたたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答おしもんどうのあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円いちだけ身を切られる想おもいで渡わたさねばならなかつた。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘してきされると、何ともいい

訳けない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があつたと、きまつてあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であつた。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思つた。それで、母親を欺して買食いの金をせしめたり、天婦羅の売上箱から小錢を盗んだりして来たことが、ちよつと後悔された。種吉の天婦羅は味で売つてなかなか評判よかつたが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻でもすこぶる厚身で、お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一錢に商つて損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くためだとの種吉の言い分はもつとも

だったが、しかし、十二歳さいの蝶子には、父親の算盤には炭代や醬油代がはいっていないと知れた。

天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬そうしき式があるたびに、駕籠かごかき人足やとに雇われた。氏神の夏祭には、水着を着てお宮の大提おぢようちん燈とうを担いで練ると、日当九十銭になった。鎧よろいを着ると三十銭あがりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約しまつしたから、祭の日通り掛りに見て、種吉は肩身かたみの狭せまい想いをし、鎧の下を汗あせが走った。

よくよく貧乏びんぼうしたので、蝶子が小学校を卒おえると、あわてて女中奉公じよちゆうぼうこうに出した。俗に、河童横町の材木屋の主人から随ずいぶ分ぶんと良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が

出たが、ゆくゆくは妾めかけにしるとの肚はらが読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋ふるてやへばかに悪い条件で女中奉公させた。河童がたろ横町は昔河童むかかづばが棲すんでいたといわれ、忌きらわれて二束三文にそくさんもんだった。その土地を材木屋の先代が買い取つて、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと蔭かげぐち口きかれていたが、妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立ちも小ぢんまり整い、材木屋はさすがに炯けいがん眼がんだった。

日本橋の古着屋で半年余り辛抱しんぼうが続いた。冬の朝、黒門市くろもん場への買出しに廻り道まわして古着屋の前を通り掛つた種吉は、店先を掃除そうじしている蝶子の手が赤ぎれて血がにじんでいるのを見て、

そのままはいって掛け合い、連れ戻した。そして所望されるま

まに曾根崎新地のお茶屋へおちよぼ（芸者の下地ツ子）にやった。

種吉の手に五十円の金はいり、これは借金払いでみるみる消

えたが、あとにも先にも纏まって受けとつたのはそれきりだった。

もとより左団扇の氣持はなかつたから、十七のとき蝶子が芸者

になると聞いて、この父はにわかには狼狽した。お披露目をする

といつてもまさか天婦羅を配って歩くわけには行かず、祝儀、

衣裳、心付けなど大変な物入りで、のみこんで抱主が出し

てくれるのはいいが、それは前借になるから、いわば蝶子を縛る

勘定になると、反対した。が、結局持前の陽気好きの氣性が

環境に染まつて是非に芸者になりたいと蝶子に駄々をこねら

れると、負けて、種吉は随分工面した。だから、辛い勤めも皆親
 のためという俗句は蝶子に当て嵌らぬ。不粋な客から、芸者にな
 ったのはよくよくの訳があつてのことやろ、全体お前の父親は：
 …と訊かれると、父親は博奕打ちでとか、欺されて田畑をとられ
 たためだとか、哀れっぽく持ちかけるなど、まさか土地柄、気性
 柄蝶子には出来なかつたが、といつて、私を芸者にしてくれんよ
 うなそんな薄情な親テあるもんかと泣きこんで、あわや勘
 当さわぎだつたとはさすがに本当のこととも言えなんだ。「私の
 お父つあんは旦那さんみたいにええ男前や」と外らしたりして悪
 趣味極まつたが、それが愛嬌になつた。——蝶子は声自
 慢で、どんなお座敷でも思い切り声を張り上げて咽喉や額に筋

を立て、襖紙ふすまがみがふるえるといふ浅ましい唄うたい方をし、陽気な座敷には無くてかなわぬ妓こであつたから、はつさい（お転婆てんば）で売つていたのだ。——それでも、たつた一人ひとり、馴染なじみの安化粧やすけしやう品問屋ひんどんやの息子むすこには何もかも本当のことを言つた。

これやすりゆうきち
維康柳吉いこうりゅうきちといひ、

女房もあり、ことし四つの子供もある三

十一歳の男だつたが、逢あい初めて三月みつぎでもうそんな仲になり、評

判立つて、一本になつた時の旦那だんなをしくじつた。中風で寝ねている

父親に代つて柳吉が切り廻している商売というのが、理髮店りはつてん向

きの石鹼せっけん、クリーム、チツク、ポマード、美顔水、ふけとりな

どの卸問屋おろしどんやであると聞いて、散髪屋へ顔を剃そりに行つても、其そ

店で使つている化粧品のマークに気をつけるようになった。ある

日、梅田新道うめだしんみちにある柳吉の店の前を通り掛ると、厚子あつしを着た柳吉が丁稚相手でっちに地方送りの荷造りを監督かんとくしていた。耳みみに挟はさんだ筆をとると、さらさらと帖ちようめん面の上を走らせ、やがて、それを口にくわえて算盤そろばんを弾はじくその姿がいかにもかいがいしく見えた。ふと視線が合うと、蝶子は耳の附根つけねまで真赧まっかになったが、柳吉は素知らぬ顔で、ちよいちよい横眼よこめを使うだけであつた。それが律儀者ちぎものめいた。柳吉はいささか吃どもりで、物をいうとき上を向いてちよつと口をもぐもぐさせる、その恰好かっこうがかねがね蝶子には思慮しりよあり気に見えていた。

蝶子は柳吉をしつかりした頼たのもしい男だと思ひ、そのように言いふ触ふらしたが、そのため、その仲は彼女の方からのぼせて行つた

といわれてもかえす言葉はないはずだと、人々は取沙汰とりぎたした。酔よい癖ぐせの浄瑠璃じょうるりのサワリで泣声をうなる、そのときの柳吉の顔を、人々は正当に判断づけていたのだ。夜店の二銭のドテ焼あだな（豚ぶたの皮身を味噌みそで煮につめたもの）が好きで、ドテ焼さんと渾名あだながついていたくらいだ。

柳吉はうまい物に掛けると眼がなくて、「うまいもん屋」へしばしば蝶子を連れて行った。彼にいわせると、北にはうまいもんを食わせる店がなく、うまいもんは何といつても南に限るそうで、それも一流の店は駄目や、汚きたないことを言うようだが銭を捨てるだけの話、本真ほんまにうまいもん食いたかったら、「一ぺん俺おれの後へ随ついて……」行くと、無論一流の店へははいらず、よくて高津こうづの湯ゆ

乱暴に白い足袋たびを踏ふみつけられて、キヤツと声を立てる、それもかえつて食しょくよく慾よくが出るほどで、そんな下手もの料理の食べ歩あふきがちよつとした愉たのしみになった。立て込んだ客すきまの隙間へ腰を割り込んで行くのも、北新地の売れっ妓こけんの沽券かかに関わるほどではなかつた。第一、そんな安物ばかり食わせどおしているものの、帯おび着物、長襦袢ながじゆばんから帯締め、腰下げ、草履ぞうりまでかなり散財さんざいしてくれているから、けちくさいといえた義理ではなかつた。クリーム、ふけとりなどはどうかと思つたが、これもこつそり愛用した。それに、父親は今なお一錢天婦羅で苦勞あぶらじしているのだ。殿様とのさまのおしのびめいたり、しんみり父親の油あぶら滲じんだ手を思い出したりして、後に随まいて廻まっているうちに、だんだんに情じょう緒ちよが出た。

新世界に二軒^{けん}、千日前に一軒、道頓堀に中座の向いと、相合橋東詰にそれぞれ一軒ずつある都合五軒の出雲屋の中でまむしのうまいのは相合橋東詰の奴^{やつ}や、ご飯にたつぷりしみこませただしの味が「なんしょ、酒しょが良う利いとおる」のをフーフー口とがらせて食べ、仲良く腹がふくれてから、法善寺の「花月^{かげつ}」へ春^{はるだ}団治^{んじ}の落語を聴^ききに行くと、ゲラゲラ笑い合つて、握^{にぎ}り合つてる手が汗をかいたりした。

深くなり、柳吉の通い方は散々頻^{ひんぱん}繁^{はん}になった。遠出もあつたりして、やがて柳吉は金に困つて来たと、蝶子にも分つた。

父親が中風で寝付くとき忘れずに、銀行の通帳と実印を蒲団^{ふとん}の下に隠^{かく}したので、柳吉も手のつけようがなかつた。所詮^{しよせん}、自由

になる金は知れたもので、得意先の理髪店を駆け廻つての集金だけで細かくやりくりしていたから、みるみる不義理が嵩んで、蒼あおくなつていた。そんな柳吉のところへ蝶子から男おとこ履ばきの草履を贈おくつて来た。添そえた手紙には、大分永いこと来て下さらぬゆえ、しん配しています。一同舌をしたいゆえ……とあつた。一度話をしたい（一同舌をしたい）と柳吉だけが判読出来るその手紙が、いつの間にか病人のところへ洩もれてしまつて、枕まくら元もとへ呼び寄せたの度重なる意見もかねがね効目なしと諦めていた父親も、今度ばかりは、打なぐつ、撲なぐるの体の自由が利かぬのが残念だと涙なみだすら浮うかべて腹を立てた。わざと五つの女の子を膝ひざの上に抱だき寄せて、若い妻は上向うかいでいた。実家へ帰る肚を決めていた事で、わずか

に叫び出すのをこらえているようだった。うなだれて柳吉は、蝶子の出しや張り奴と肚の中で呟いたが、しかし、蝶子の気持は悪くとれなかった。草履は相当無理をしたらしく、

戎橋「天狗」

の印がはいつており、鼻緒は蛇の皮であった。

「釜の下の灰まで自分のもんや思たら大間違いやぞ、久離切つての勘当……」を申し渡した父親の頑固は死んだ母親もかねがね泣かされて来たくらいゆえ、いったんは家を出なければ収まりがつかなかった。家を出た途端に、ふと東京で集金すべき金がまだ残っていることを思い出した。ざつと勘定して四五百円はあると知って、急に心の曇りが晴れた。すぐ行きつけの茶屋へあがって、蝶子を呼び、物は相談やが駈落ちせえへんか。

あくる日、柳吉が梅田の駅で待っていると、蝶子はカンカン日の当っている駅前広場を大股おおまたで横切つて来た。髪かみをめぐねに結っていたので、変に生々しい感じがして、柳吉はふいといやな気がした。すぐ東京行きの汽車に乗った。

八月の末で馬鹿ばかに蒸し暑い東京の町を駆けずり廻り、月末にはまだ二三日間まがあるというのを拝み倒たおして三百円ほど集つたその足で、熱海あつみへ行つた。温泉芸者を揚げようというのを蝶子はたしなめて、これからの二人ふたりの行末のことを考えたら、そんな呑気のんきな氣イでいてられへんともつともだったが、勘当といつてもすぐ詫びをいれて帰り込む肚の柳吉は、かめへん、かめへん。無断で抱主のところを飛出して来たことを気にしている蝶子の肚の中など、

無視しているようだった。芸者が来ると、蝶子はしかし、ありつたけの芸を出し切つて一座を浚さらい、土地の芸者から「大阪おおさかの芸者衆にはかなわんわ」と言われて、わずかに心が慰なぐさまった。

二日そうして経たち、午ひるごろ頃、ごおツと妙な音みょうがして来た途端に、激はげしく揺ゆれ出した。「地震じしんや」「地震じしんや」同時に声が出て、蝶子は襖つかに掴つかまったことは掴つかまったが、いきなり腰こしを抜ぬかし、キヤツと叫こゑんで坐すわり込んでしまった。柳吉は反対側かへの壁かべにしがみついたまま離はなれず、口も利けなかつた。お互たがいの心にその時、えらい駈か落ちおちをしてしまったという悔くが「瞬いつしゆんあつた。」

避難ひなん列車れきえんの中でろくろく物も言わなかつた。やっと梅田うめだの駅えきに

着くと、真^ますぐ上^{かみ}塩^し町の種^ね吉^{きち}の家へ行^いつた。途^{みち}々^{みち}、電^{でん}信^{しん}柱^{ちゆう}に
関^{かん}東^{とう}大^{だい}震^{しん}災^{さい}の号^{ごう}外^{がい}が生^{なま}々^ましく貼^はられていた。

西^{せい}日^{にち}の当^{あた}るところで天^{てん}婦^ふ羅^らを揚^あげていた種^ね吉^{きち}は二人^{ふたり}の姿^{すがた}を見る
と、吃^{びつ}驚^{くわう}してしばらくは口^{くち}も利^りけなんだ。日^ひに焼^やけたその顔^{かほ}に、
汗^{あせ}とはつきり区^く別^{べつ}のつく涙^{なみだ}が落^おちた。立^たち話^わでだんだんに訊^きけば、
蝶^{てつ}子^しの失^{しつ}踪^{そう}はすぐ抱^{かか}主^{ぬし}から知^しらせがあり、ど^{どこ}にどうしてい
ることやら、悪^{あく}い男^{おとこ}にそ^{その}かさ^{かさ}れて売^うり飛^とばされたのと違^{ちが}うや
ろか、生^{なま}きとつて^つて^てく^くれて^るんや^ろかと心^{こころ}配^{はい}で夜^よも眠^{ねむ}れなんだとい
う。悪^{あく}い男^{おとこ}云^い々^ん々^んを聴^きき咎^{とが}めて蝶^{てつ}子^しは、何^{なに}はともあ^あれ、扇^{せん}子^すをパ
チパチ^{ぱちぱち}させて突^つつ立^たつて^いる柳^{やなぎ}吉^{きち}を「この人^{ひと}私^{わたし}の何^{なに}や」と紹^{しょう}
介^{かい}した。「へい、おこし^あやす」種^ね吉^{きち}はそれ以上^{いじゆう}挨^{あい}拶^{さつ}が^つ続^つかず、

そわそわしてろくろく顔もよう見なかつた。

お辰は娘の顔を見た途端に、浴衣ゆかたの袖そでを顔にあてた。泣き止やん

で、はじめて両手をつけて、「このたびは娘がいろいろと……」

柳吉に挨拶し、「弟の信しんいち一は尋じんじょう常四年で学校へ上つとりま

すが、今日きょうは、まだ退ひけて来とりまへんで」などと言うた。挨拶

の仕様がなかつたので、柳吉は天候のことなど吃り勝ちに言う

た。種吉は氷水を註文いに行つた。

銀蠅ぎんばえの飛びまわる四畳じようの部屋は風も通らず、ジーンと音がす

るように蒸し暑かつた。種吉が氷いちごを提箱さげばこに入れて持ち帰

り、皆は黙々もくもくとそれをすすつた。やがて、東京へ行つて来た旨むね

蝶子が言うのと、種吉は「そら大変や、東京は大地震や」吃驚びっくりし

てしまったので、それで話の糸口はついた。避難列車で命からがら逃げて来たと聞いて、両親は、えらい苦労したなとしきりに同情した。それで、若い二人、とりわけ柳吉はほっとした。「何とお詫びしてええやら」すらすら彼は言葉が出て、種吉とお辰はすこぶる恐縮きょうしゆくした。

母親の浴衣を借りて着替きかえると、蝶子の肚はきまった。いったん逐電ちくでんしたからにはおめおめ抱主のところへ帰れまい、同じく家へ足踏み出来ぬ柳吉と一緒に苦労する、「もう芸者を止めまっさ」との言葉に、種吉は「お前の好きなようにしたらええがな」子あまに甘いとところを見せた。蝶子の前借は三百円足らずで、種吉はもはや月賦げつぷで払う肚を決めていた。「私わてが親爺おやじに無心して払いま

つき」と柳吉も黙^{だま}っているわけに行かなかつたが、種吉は「そんなことしてもらったら困りまんがな」と手を振^ふった。「あんさんのお父つあんに都合^{ぐっ}が悪うて、私は顔合わされしまへんがな」柳吉は別に異を樹^たてなかつた。お辰は柳吉の方を向いて、蝶子は癩^は疹^{しん}厄^かの他には風邪^{かぜ}一つひかしたことはない、また身体^{からだ}のどこ探してもかすり傷一つないはず、それまでに育てる苦勞は……言い出して涙の一つも出る始末に、柳吉は耳の痛い気がした。

二三日、狭苦しい種吉の家でごろごろしていたが、やがて、黒門市場の中の路地裏に二階借りして、遠慮^{しよたい}気兼ねのない世帯^{しよたい}を張^たった。階^{した}下は弁当や寿司につかう折箱の職人で、二階の六畳は

もつぱら折箱の置場にしてあつたのを、月七円の前払いで借りたのだ。たちまち、暮くらしに困つた。

柳吉に働はたらきがないから、自然蝶か子が稼かせぐ順序で、さて二度の勤めに出る気もないとすれば、結局稼かせぐ道はヤトナ芸者と相場が決つていた。もと北の新地にやはり芸者をしていたおきんという年と増しま芸者が、今は高津に一軒構えてヤトナの周旋しゅうせん屋やみたいなことをしていた。ヤトナというのはいわば臨時雇で宴えん会かいや婚こん礼れいに出張する有芸仲居のことで、芸者の花代よりは随分安上りだから、けちくさい宴会からの需要が多く、おきんは芸者上りのヤトナ数人と連絡れんらくをとり、派出しゅつしゆさせて仲介ちゆうかいの分をはねると相当な儲もうけになり、今では電話の一本も引いていた。一宴会、夕方から夜よ

更けまでで六円、うち分をひいてヤトナの儲けは三円五十銭だが、婚礼の時は式役代も取るから儲けは六円、祝儀もまぜると悪い収入ではないとおきんから聴いて、早速仲間にはいった。

三味線しやみせんをいれた小型のトランク提げて電車で指定の場所へ行くと、すぐ膳部ぜんぶの運びから爛かんの世話に掛かる。三、四十人の客にヤトナ三人で一通り酌しやくをして廻るだけでも大変なのに、あとがえらかった。おきまりの会費で存分愉しむ肚の不粋な客を相手に、息のつく間もないほど弾ひかされ歌わされ、浪花節なにわぶしの三味こわいから声こわい色の合の手まで勤めてくたくたになっているところを、安来節やすぎぶしを踊おどらされた。それでも根が陽気好きだけに大して苦にもならず身をいれて勤めていると、客が、芸者よりましや。やはり悲し

かった。本当の年を聞けば吃驚するほどの大年増の朋輩が、
 おひらきの前に急に祝儀を当てこんで若い女めいた身振りをする
 のも、同じヤトナであつてみれば、ひとごとではなかつた。夜更
 けて赤電車で帰つた。日本橋一丁目で降りて、野良犬や拾い屋
 (バタ屋)が芥箱をあさつてゐるほかに人通りもなく、静まり
 かへつた中にただ魚の生臭い臭気が漂うてゐる黒門市場の中
 を通り、路地へはいるとプンプン良い香いがした。

山椒昆布を煮る香いで、思い切り上等の昆布を五分四角ぐら
 いの大きさに細切りして山椒の実と一緒に鍋にいれ、亀甲万の
 濃口醤油をふんだんに使つて、松炭のどろ火でどろどろ二昼
 夜煮つめると、戎橋の「おぐらや」で売つてゐる山椒昆布と

同じ位のうまさになると柳吉は言い、たいくつ退屈しのぎにきのう昨日からそれに掛り出していたのだ。火種を切らさぬことと、時々かきまわしてやるのが大切で、そのため今日は一步も外へ出ず、だからいつもはきまつて使うはずの日に一円のこづか小遣いに少しも手をつけていなかった。蝶子の姿を見ると柳吉は「どや、ええあんばい按配に煮えて来よつたやろ」長い竹たけぼし箸で鍋の中をか掻き廻しながら言うた。そんな柳吉に蝶子はひそかにそこはかとなきこい恋しさを感ずるのだが、癖で甘つたるい気分は外に出せず、着物の裾をすそひらいた長襦袢の膝でぺたりと坐るなり「なんや、まだたいてるのんか、えらいひま暇かかって何してるのや」こんな口を利いた。

柳吉は二十歳の蝶子のことを「おぼはん」と呼ぶようになった。

「おぼはん小遣い足らんぜ」そして三円ぐらい手に握ると、昼間は将棋しょうぎなどして時間をつぶし、夜は二ツ井戸ふたの「お兄ちゃん」という安カフェへ出掛けて、女給の手にさわり、「僕ぼくと共鳴せえへんか」そんな調子だったから、お辰はあれでは蝶子が可哀想かわいそうやと種吉に言い言いたが、種吉は「坊ぼん坊んやから当り前のこつちや」別に柳吉を非難もしなかつた。どころか、「女房や子供捨てて二階にがいずまいせんらん言うのも、言や言うものの、蝶子が悪いさかいや」とかえつて同情した。そんな父親を蝶子は柳吉のために嬉うれしく、苦勞の仕甲斐しがいあると思つた。「私のお父つあん、ええところあるやろ」と思つてくれたのかくれなのか、「うん」と柳吉は氣のない返事で、何を考へているのか分からぬ顔をして

いた。

その年も暮に近づいた。押しつまつて何となく慌しいあわただ気持のするある日、正月の紋もんつき附などを取りに行くと言つて、柳吉は梅田うめだ新道しんみちの家へ出掛けて行つた。蝶子は水を浴びた気持がしたが、行くなという言葉がなぜか口に出なかつた。その夜、宴会の口が掛つて来たので、いつものように三味線をいれたトランクを提げて出掛けたが、心は重かつた。柳吉が親の家へ紋附を取りに行つたというただそれだけの事として軽々しく考えられなかつた。そこには妻も居れば子もいるのだ。三味線の音色は冴さえなかつた。それでも、やはり襖紙がふるえるほどの声で歌い、やつとおひら

きになつて、雪の道を飛んで帰つてみると、柳吉は戻つていた。火鉢ひばちの前に中腰になり、酒で染まった顔をその中に突つ込むようにしよんぼり坐つているその容ようす子が、いかにも元気がないと、一目でわかつた。蝶子はほつとした。——父親は柳吉の姿を見るなり、寢床ねどこの中で、何しに來たと呶鳴どなりつけたそうである。妻は籍せきを抜いて実家に帰り、女の子は柳吉の妹の筆子が十八の年で母親代りに面倒めんどうみているが、その子供にも会わせてもらえなかつた。柳吉が蝶子と世帯を持ったと聴いて、父親は怒おこるといふよりも柳吉を嘲ちやうしやう笑し、また、蝶子のことについてかなりひどい事を言つたといふことだつた。——蝶子は「私わてのこと悪う言やはんのは無理おまへん」としんみりした。が、肚の中では、私の力で柳吉

を一人前にしてみせまつさかい、心配しなはなんとひそかに柳吉の父親に向つて呶く気持を持った。自身にも言い聴かせて「私は何も前の奥さんの後あとがま釜かまに坐るつもりやあらへん、維康を一人前の男に出世させたら本望ほんもうや」そう思うことは涙をそそる快感だった。その気持の張りと柳吉が帰つて来た喜びとで、その夜興奮して眠れず、眼をピカピカ光らせて低い天てんじょう井いを睨にらんでいた。

まえまえから、蝶子はチラシを綴とじて家計簿かけいぼを作り、ほうれん草三錢、風呂錢ふうろせん三錢、ちり紙四錢、などと毎日の入費を書き込んで世帯を切り詰め、柳吉の毎日の小遣い以外に無駄な費用は慎つつしんで、ヤトナの儲けの半分ぐらゐは貯金していたが、そのことがあつてから、貯金に対する気の配り方も違つて来た。一錢二錢の金

も使い惜しみ、半襟も垢じみた。正月を当てこんでうんと材料を仕入れるのだとて、種吉が仕入れの金を無心に来ると、「私には金みたいなものあらへん」種吉と入れ代つてお辰が「維康さんにカフエたらいうとこイ行かす金あつてもか」と言いに来たが、うんと言わなかつた。

年が明け、松の内も過ぎた。はつきり勘当だと分つてから、柳吉のしよげ方はすこぶる哀れなものだった。父性愛ということもあつた。蝶子に言われても、子供を無理に引き取る気の出なかつたのは、いづれ帰参がかなうかも知れぬという下心があるためだった。それでも、子供と離れていることはさすがに淋しいと、これは人ごとでなかつた。ある日、昔の遊び友達に会い、誘われ

ると、もともと好きな道だったから、久しぶりにぐたぐたに酔うた。その夜はさすがに家をあけなかったが、翌日、蝶子が隠していた貯金帳をすっかりおろして、昨夜の返礼だとして友達を呼び出し、難波新地へはまりこんで、二日、使い果して魂の抜けた男のようにとぼとぼ黒門市場の路地裏長屋へ帰って来た。「帰るところ、よう忘れんかったこつちやな」そう言つて蝶子は頸筋を掴んで突き倒し、肩をたたく時の要領で、頭をこつこつたたいた。「おぼはん、何すんねん、無茶しな」しかし、抵抗する元氣もないかのようだった。二日酔いで頭があばれとると、蒲団にくるまつてうんうん唸っている柳吉の顔をピシヤリと撲つて、何となく外へ出た。千日前の愛進館で京山小円の浪花節を聴いたが、一

人では面白いとも思えず、出ると、この二三日飯も咽喉へ通らなかつたこととて急に空腹を感じ、樂天地横の自由軒で玉子入りのライスカレーを食べた。「自由軒ここのラ、ラ、ライスカレーはご飯にあんじようま、ま、ま、まむしてあるよつて、うまい」とかつて柳吉が言つた言葉を想い出しながら、カレーのあとのコーヒーを飲んでみると、いきなり甘い氣持が胸に湧わいた。こつそり歸つてみると、柳吉はいびきをかいていた。だし抜あけに、荒あ々あしく揺すぶつて、柳吉が眠い眼をあけると、「阿呆あほんだら」そして唇くちびるをとがらして柳吉の顔へもつて行つた。

あくる日、二人で改めて自由軒へ行き、歸りに高津のおきんの

所へ仲の良い夫婦の顔を出した。ことを知っていたおきんは、柳吉に意見めいた口を利いた。おきんの亭主ていしゅはかつて北浜きたはまで羽振りが良くおきんを落籍ひかして死んだ女房の後釜に据すえた途端とたんに没落つらくしたが、おきんは現在のヤトナ周旋屋、亭主は恥はじをしのんで北浜の取引所へ書記に雇われて、いわば夫婦共稼ぎで、亭主の没落はおきんのせいなどと人に後指させぬ今の暮しだと、引合ひきあいに出したりした。「維康さん、あんたもぶらぶら遊んでばかりしてんと、何ぞ働く所を……」探す肚があるのかないのか、柳吉は何の表情もなく聴いていた。維康さんの肚は分らんとおきんはあとで蝶子に言うたので、蝶子は肩身の狭い思いがした。が、間もなく働き口を見つけたので、蝶子は早速おきんに報告した。そ

れで肩身が広くなったというほどではなかったが、やはり嬉しかった。

千日前「いろは牛肉店」の隣となりにある剃刀屋かみそりやの通い店員で、朝十時から夜十一時までの勤務、弁当自弁の月給二十五円だが、それでも文句なかったらと友達が紹介してくれたのだ。柳吉はいやとは言えなかった。安全剃刀、レザー、ナイフ、ジャツキその他理髪に關係ある品物を商っているのだから、やはり理髪店相手の化粧品を商っていた柳吉には、いちばん適しているだろうと骨折ってくれた、その手前もあつた。門口の狭い割に馬鹿に奥行のあつる細長い店だから昼間なぞ日が充じゅうぶん分ぶん射しさず、昼電を節約しまつした薄暗いところで火鉢の灰をつつきながら、戸外の人通りを眺ながめて

いると、その明るさが嘘うそのようだった。ちやうど向い側が共同便所でその臭気がたまらなかつた。その隣りは竹林寺ちくりんじで、門の前の向つて右側では鉄冷鉱泉を売っており、左側、つまり共同便所に近い方では餅もちを焼いて売っていた。醤油をたっぷりつけて狐きっねいろ

色いろにこんがり焼けてふくれているところなぞ、いかにもうまそうだった。買かう気は起おきなかつた。餅屋の主婦が共同便所から出て手て洗せん水すいを使つかわぬと覺おしこかつたからや、と柳吉は歸かつて言いうた。また曰いわく、仕事は楽らくで、安全剃刀の広告人形がしきりに身み体ていを動うかして剃刀をといでいる恰好が面白いとて飾ウインドー窓まどに吸すいつけられる客があると、出て行つて、おいでやす。それだけの芸げでこと足りた。蝶子は、「そら、よろしおまん」そう励はげました。

剃刀屋で三月みつきほど辛抱したが、やがて、主人と喧嘩けんかして癩しやくやらとて店を休み休みし出したが、蝶子はその口実を本真ほんまだと思ひ、朝おこしたりしなくなり、ずるずるべったり店をやめてしまった。蝶子は一層ヤトナ稼かぎよう業に身を入れた。彼女だけには特別の祝儀を張り込まねばならぬと宴会の幹事が思うくらいであつた。祝儀はしかし、朋輩と山分けだから、随分と引き合わぬ勘定だが、それだけに朋輩の気受けはよかつた。蝶子はんたてまつ蝶子はんと奉られるので良い気になつて、朋輩へ二円、三円と小錢を貸したが、渡すなり後悔して、さすがにはつきり催促出来なかつたから、何かとべんちやら（お世辞）して、はよ返してくれという想いをそれとなく見せるのだつた。五十錢の金にもちくちく胸の痛む気がした

が、柳吉にだけは、小遣いをせびられると気前よく渡した。柳吉は毎日がいかにも面白くないようで、殊ことにこつそり梅田新道へ出掛けたい日は帰ってからのふさぎ方が目立ったので、蝶子は何かと氣を使った。父の勘氣がとけぬことが憂鬱ゆううつの原因らしく、そのことにひそかに安堵あんどするよりも氣持の負担の方が大きかった。それで、柳吉がしばしばカフェへ行くと知つても、なるべく焼餅を焼かぬように心掛けた。黙って金を渡すときの氣持は、人が思っているほどには平氣ではなかつた。

実家に帰っているという柳吉の妻が、肺で死んだという噂うわさを聴くと、蝶子はこつそり法善寺の「縁結えんむすび」に詣まいて蠟燭ろうそくなど思い切つた寄進をした。その代り、寢覚めの悪い氣持がしたので、

戒かいみょう名なを聞いたりして棚たなに祭まつった。先妻の位牌いはいが頭の上にあるのを見て、柳吉は何となく変な気がしたが、出しゃ張るなどとも言わなかった。言えば何かと話かもつれて面倒だとさすがに利口な柳吉は、位牌さえ蝶子の前では拜まなかつた。蝶子は毎朝花をかえたりして、一分の隙もなく振舞ふるまった。

二年経つと、貯金が三百円を少し超こえた。蝶子は芸者時代のことを思い出し、あれはもう全部払はらうてくれたんかと種吉に訊くと、「さいな、もう安心しーや、この通りや」と証文出して来て見せた。母親のお辰はセルロイド人形の内職をし、弟の信一は夕刊売りをしていたことは蝶子も知っていたが、それにしてもどうして

工面して払ったのかと、まぶた瞼が熱くなった。それで、はじめに弟に五十銭、お辰に三円、種吉に五円、それぞれくれてやる気が出た。そこで貯金はちょうど三百円になった。そのうち、柳吉が芸者遊びに百円ほど使ったので、二百円に減った。蝶子は泣けもしなかった。夕方電灯もつけぬ暗い六畳の間の真まん中なかにぺたりと坐り込み、腕うでぐみして肩で息をしながら、障子紙の破れたところをじつと睨にらんでいた。柳吉は三味線の撥ぼちで撲うられた跡あとを押おさえようともせず、ごろごろしていた。

もうこれ以上節約しまつの仕様もなかったが、それでも早くその百円を取り戻さねばならぬと、いろいろに工夫した。商売道具の衣裳も、よほどせっぱ詰れば染替えをするくらいで、あとは季節季節

の変わり目ごとに質屋での出し入れで何とかやりくりし、呉服屋ごふくやに物言うのものはわかるほどであつたお蔭で、半年経たぬうちにやつと元の額になつたのを機会しおに、いつまでも二階借りしていては人あなどに侮られる、一軒借りて焼芋屋やきいもやでも何でも良いから商売しようときつそく柳吉に持ちかけると、「そうやな」気の無い返事だつたが、しかし、あくる日から彼は黙々として立ちまわり、高津神社坂下に間口一間、奥行三間半の小さな商売家を借り受け、大工を二日雇い、自分も手伝つてしかるべく改造し、もと勤めていた時の経験と顔とで剃刀問屋から品物の委託いたくをしてもらうと瞬またたく間に剃刀屋の新店が出来上つた。安全剃刀の替刃かえば、耳かき、頭かき、鼻毛抜き、爪切りつめきなどの小物からレザー、ジャツキ、西洋剃刀な

ど商売柄、錢湯帰りの客を当て込むのが第一と店も錢湯の真向いに借りるだけの心くばりも柳吉はしたので、蝶子はしきりに感心し、開店の前日朋輩のヤトナ達が祝いの柱時計をもつてやって来ると、「おいでやす」声の張りも違った。そして「主人がこまめにやってくれまっさかいな」と言い、これは柳吉のことを褒めたつもりだった。襷がけでこそそ陳列棚の拭き掃除をしている柳吉の姿は見ようによつては、随分男らしくもなかつたが、女たちははいずれも感心し、維康さんも慾が出るとなかなかの働き者だと思つた。

開店の朝、向う鉢巻でもしたい気持で蝶子は店の間に坐つていた。午頃、さっぱり客が来えへんなと柳吉は心細い声を出した。

たが、それに答えず、眼を皿さらのようにして表を通る人を睨にらんでいた。午過ぎ、やっと客がきて安全の替刃一枚六銭の売上げだった。「まいどおおけに」「どうぞごひいきに」夫婦がかりで薄気味悪うすきわるいほどサーヴィスをよくしたが、人気が悪いのか新店のためか、その日は十五人客が来ただけで、それもほとんど替刃ばかり、売上げは×《し》めて二円にも足らなかった。

客足がさっぱりつかず、ジレットの一つも出るのは良い方で、大抵は耳かきか替刃ばかりの浅ましい売上げの日が何日も続いた。話の種も尽つきて、退屈したお互いに顔を情けなく見かわしながら店番していると、いつそ恥かしい想いがした。退屈しのぎに、昼の間の一時間か二時間浄瑠璃を稽古けいこしに行きたいと柳吉は言い出

したが、とめる気も起らなかつた。これまでぶらぶらしている時にはいつでも行けたのに、さすがに憚はばかつて、商売をするようになってから稽古したいという。その気持を、ひとは知らず蝶子は哀れに思った。柳吉は近くの下寺町の竹本組そしやう昇あさに月謝五円で弟子入りし二ツ井戸の天牛書店で稽古本の古いのを漁あさつて、毎日ぶらりと出掛けた。商売に身をいれるといつても、客が来こなければ仕様がなといった顔で、店番をするときも稽古本をひらいて、ぼそぼそなる、その声がいかにも情けなく、上達したと褒めるのもなんとなく気が引けるくらいであつた。毎月食い込んで行つたので、再びヤトナに出ることにした。二度目のヤトナに出る晩、苦勞とはこのことかとさすがにしんみりしたが、宴会の席ではや

はり稼業大事とつとめて、一人で座敷を浚さらつて行かねばすまぬ、そんな気性はめつたに失われるものではなかった。夕方、蝶子が出掛けて行くと、柳吉はそわそわと店を早仕舞いして、二ツ井戸の市場の中にある屋台店でかやく飯とおこぜの赤出しを食い、烏か貝らすがいの酢味噌で酒を飲み、六十五銭の勘定払つて安いもんやなと、カフェ「一番」でビールやフルーツをとり、肩入れをしていゝる女給にふんだんにチップをやると、十日分の売上げが飛んでしもうた。ヤトナの儲けでどうにか暮しを立ててはいるものの、柳吉の使い分がはげしいもので、だんだん問屋の借りも嵩んで来て、一年辛抱したあげく、店の権利の買手がついたのを幸い、思い切つて店を閉めることにした。

店仕舞いメチャクチャ大投売りの二日間の売上げ百円余りと、権利を売った金百二十円と、合わせて二百二十円余りの金で問屋の払いやあちこちの支払いを済ませると、しかし十円も残らなかつた。

二階借りするにも前払いでは困ると、いろいろ探しているうちに、おきんの所へ出はいりして顔見知りの呉服屋の担ぎ屋かつやが「家うちの二階空いてまんね、蝶子さんのことでつさかい部屋代はいつでもよろしおま」と言うたのをこれ倖さいわいに、飛田大門前とびた通りの路地裏にあるその二階を借りることになった。柳吉は相変らず浄瑠璃の稽古に出掛けたり、近所にある赤暖簾あかのれんの五銭喫茶店きつさてんで何時間も時間をつぶしたりして他愛なかつた。蝶子は口が掛れば雨

の日でも雪の日でも働かいでおくものかと出掛けた。もうヤトナ達の中でも古顔になった。組合でも出来るなら、さしずめ幹事というところで、年上の朋輩からも蝶子姐ねえさんと言われたが、まさか得意になってはいられなかった。衣裳の裾なども恥かしいほど擦り切れて、咽喉のどから手の出るほど新しいのが欲しかった。おまけに階下したが呉服の担ぎ屋とあってみれば、たとえ銘めい仙せんの一枚でも買ってやらねば義理が悪いのだが、我慢してひたすら貯金に努めた。もう一度、一軒店の商売をしなければならぬと、親の仇かたきをとるような気持で、われながら浅ましかった。

さん年経つと、やっと二百円たまつた。柳吉が腸が痛むというので時々医者通いし、そのため入費が嵩んで、齒がゆいほど、金

はたまらなかつたのだ。二百円出来たので、柳吉に「なんぞええ商売ないやろか」と相談したが、こんどは「そんな端はしたがね金ではどないも仕様がない」と乗気にならず、ある日、そのうち五十円の金を飛田の廓くるわで瞬まく間に使ってしまった。四五日まえに、妹が近々むこ賀養子を迎むかえて、梅田新道の家を切り廻して行くという噂が柳吉の耳にはいつていたので、かねがね予期していたことだったが、それでも娼妓しょうぎを相手に一日で五十円の金を使ったとは、むしろ呆あきれてしまった。ぼんやりした顔をぬつと突き出して帰って来たところを、いきなり襟を掴んで突き倒し、馬乗りになって、ぐいぐい首を締めあげた。「く、く、く、るしい、苦しい、おばはん、何すんねん」と柳吉は足をばたばたさせた。蝶子は、もう

思う存分折檻せつかんしなければ気がすまぬと、締めつけ締めつけ、打つ、撲る、しまいに柳吉は「どうぞ、かんにんしてくれ」と悲鳴をあげた。蝶子はなかなか手をゆるめなかった。妹が智養子を迎えると聴いたくらいでやけになる柳吉が、腹立たしいというより、むしろ可哀想で、蝶子の折檻は痴情ちじょうめいた。隙を見て柳吉は、ヒ―ヒ―声を立てて階下へ降り、逃げまわったあげく、便所の中へ隠れてしまった。さすがにそこまでは追わなかった。階下の主婦は女だてらとたしなめたが、蝶子は物一つ言わず、袖に顔をあてて、肩をふるわせると、思いがけずはじめに女らしく見えたこと、主婦は思った。年下の夫を持つ彼女はかねがね蝶子のことを良く言わなかった。毎朝味噌こしらしるを拵たすきえるとき、柳吉が襷たすきがけで鯉かつお

節ぶしをけずっているのを見て、亭主にそんなことをさせて良いもんかとほとんど口に出かかった。好みの味にするため、わざわざ鰹節けずりまで自分の手でしなければ収まらぬ柳吉の食意地の汚さなど、知らなかつたのだ。担ぎ屋も同感で、いつか蝶子、柳吉と三人連れ立って千日前へ浪花節を聴きに行つたとき、立て込んだ寄席よせの中で、誰だれかに悪戯いたずらをされたとして、キャツと大声を出して騒さわぎまわつた蝶子を見て、えらい女やと思ひ、体裁の悪そうな顔で目をしよぼしよぼさせている柳吉にほとほと同情した、と歸つて女房に言つた。「あれでは今に維康さんに嫌きらわれるやろ」夫婦はひそひそ語り合つていたが、案の定、柳吉はある日ぶらりと出て行つたまま、幾いく日にちも歸つて来なかつた。

七日経つても柳吉は帰つて来ないので、半泣きの顔で、種吉の家へ行き、梅田新道にいるに違いないから、どんな容子かこつそり見て来てくれと頼んだ。種吉は、娘の頼みを撥ねつけるといふわけではないが、別れる気の先方へ行つて下手に顔見られたら、どんな目で見られるかも知れぬと断つた。「下手に未練もたんと別れた方が身のためやぜ」などとそれが親の言う言葉かと、蝶子は興奮の余り口喧嘩までし、その足で新世界の八卦見のところへ行つた。「あんたが男はんのためにつくすその心が仇になる。大体この星の人は……」年を聞いて丙午だと知ると、八卦見はもう立板に水を流すお喋りで、何もかも悪い運勢だった。「男はんの心は北に傾かたむいている」と聴いて、ぞつとした。北とは梅田新

道だ。金を払って外へ出ると、どこへ行くという当てもなく、真夏の日がカンカン当っている盛り場さかばを足早に歩いた。熱海の宿で出くわした地震のことが想い出された。やはり暑い日だった。

十日目、ちようど地蔵盆じぞうぼんで、路地にも盆踊りがあり、無理に引っぱり出されて、単調な曲を繰りかえし繰りかえし、それでも時々調子に変化をもたせて弾いていると、ふと絵行燈えあんどんの下をひよこひよこ歩いて来る柳吉の顔が見えた。行燈の明りに顔が映えて、眩まぶしそうに眼をしょぼつかせていた。途端に三味線の糸が切れて撥ねた。すぐ二階へ連れあがって、積る話よりもさきに身を投げかけた。

二時間経って、電車がなくなるよつてと帰って行つた。短い時

間の間にこれだけのことを柳吉は話した。この十日間梅田の家へ
いりびたっていたのは外やない、むろん思うところあつてのこと
や。妹が聳養子をとるとあれば、こちらははいちやく廃嫡と相場は決つ
ているが、それで泣寝入りしろとは余りの仕打やと、梅田の家へ
駆け込むなり、毎日膝詰の談判をやつたところ、一向に効目がな
い。妻を捨て、子も捨てて好きな女と一緒に暮している身に勝目
はないが、廃嫡は廃嫡でももら貰うだけのものは貰わぬと、後へは行
けぬおも思てこて挺子でも動かへんなんだが、親父の言分はおやしどうや。蝶子、
お前しにがね氣にしたあかんぜ。「あんな女と一緒に暮している者に金を
やつても死しにがね金同然や、結局女に欺されて奪とられてしまうが落ち
や、ほしければ女と別れろ」こない言うたきり親父はもう物も言

いくさらん。そこで、蝶子、ここは一番芝居を打つこつちや。別れた、女も別れる言うてますと巧く親父を欺して貰うだけのものは貰^{もろ}たら、あとは廢嫡でも灰神樂でも、その金で氣樂な商売でもやつて二人末^{すえなご}、永^{とも}う共白髪まで暮そうやないか。いつまでもお前にヤトナさせとくのも可哀想や。それで蝶子、明日家^{あした}の使者が来よつたら、別れまつさときっぱり言うて欲しいんや。本真^{ほんま}の氣持で言うのやないねんぜ。しし、芝居や。芝居や。金さえ貰たらわいは直^じき歸つて来る。——蝶子の胸に甘い氣持と不安な氣持が残つた。

翌朝、高津のおきんを訪れた。話を聴くと、おきんは「蝶子はん、あんた維康さんに欺されたはる」と、さすがに苦勞人だった。

おきんは、維康が最初蝶子にないしよ内緒で梅田へ行つたと聴いて、これはうっかり芝居に乗れぬと思つた。柳吉の肚は、蝶子が別れると言つてしまえば、それでまんまと帰参がかない、そのまま梅田の家へ坐り込んでしまふつもりかも知れぬ。とそうまではつきりと悪くとらず、またいくら化粧問屋でもそこは父親がおろ卸してくれぬとすれば、その時はその時で悪く行つても金がとれるし、いわば二道を掛けているか、それとも自分で自分の氣持がはつきりしてないか、何しろ、柳吉には子供もあることだと、そこまでは口に出さなかつたが、いずれにせよ蝶子が別れると言わなければ、柳吉は親の家におれぬ勘定だから結局は柳吉に戻つて欲しければ「別れると言うたらあきまへんぜ」蝶子はおきんの言う通りにし

た。嘘にしろ別れると言うより、その方が言い易やすかった。それに、間もなく顔を見せた使の者は手切金を用意しているらしく、貰えばそれきりで縁が切れそうだった。

三日経つと柳吉は帰つて来た。いそいそとした蝶子を見るなり「阿呆やな、お前の一言で何もかも滅茶苦茶や」不機嫌ふきげん極まった。手切金云々の気持を言うと、「もろたら、わいのもらう金と二重取りでええがな。ちよつとは慾を出さんかいや」なるほどと思った。が、おきんの言葉はやはり胸の中に残った。

父親からは取り損つたが、妹から無心して来た金三百円と蝶子の貯金を合わせて、それで何か商売をやろうと、こんどは柳吉の

口から言い出した。剃刀屋のにがい経験があるから、あれでもなし、これでもなしと柳吉の興味を持ちそうな商売を考えた末、結局焼芋屋でもやるより外には……と困っているうちに、ふと関かん東煮屋だきが良いと思いつき、柳吉に言うと、「そ、そ、そらええ考えや、わいが腕前ふるってええ味のもんを食わしたる」ひどく乗気になった。適当な売り店がないかと探すと、近くの飛田とびた大門前通りに小さな関東煮の店が売りに出ていた。現在年寄夫婦が商売しているのだが、土地柄、客種が柄悪く荒っぽいので、大人おとなしい女子衆おなごしは続かず、と行って気性の強い女はこちらがなめられるといった按配で、ほとほと人手に困って売りに出したのだというから、掛け合うと、案外安く造作から道具いっさい一切付き三百五十円

で譲^{ゆず}つてくれた。階下は全部漆喰^{しつくい}で商売に使うから、寝泊^{ねとま}りするとところは二階の四畳半一間あるきり、おまけに頭がつかえるほど天井が低く陰気臭^{いんきくさ}かったが、廓^{くわわ}の往^ゆき帰りで人通りも多く、それに角^{かどみせ}店で、店の段取から出入口の取り方など大変良かったので、値を聞くなり飛びついて手を打ったのだ。新規開店に先立ち、法善寺境内の正弁丹吾亭や道頓堀のたこ梅をはじめ、行き当りばったりに関東煮屋の暖簾^{のれん}をくぐって、味加減や銚^{ちょうし}子の中身の工合、商売のやり口などを調べた。関東煮屋をやると聴いて種吉は、「海老^{えび}でも烏賊^{いか}でも天婦羅ならわいに任しとくはなはれ」と手伝いの意を申し出^いでたが、柳吉は、「小鉢物はやりまっけど、天婦羅は出しまへん」と体裁よく断った。種吉は残念だった。お

辰は、それみたことかと種吉を嘲あざけった。「私わてらに手伝てつどうてもろたら損や思たはるのや。誰が鏢びた一文でも無心するもんか」

お互いの名を一字ずつとつて「蝶柳」と屋号をつけ、いよいよ開店することになった。まだ暑さが去っていないなかつたことと思いきつて生ビールの樽たるを仕込んでいた故、はよ売りきつてしまわねば気が抜けてわや（駄目）になると、やきもき心配したほどでもなく、よく売れた。人手を借りず、夫婦だけで店を切り廻したので、夜の十時から十二時頃までの一番たてこむ時間は眼のまわるほど忙いそがしく、小便に立つ暇もなかつた。柳吉は白い料理着たに高た下駄かげたという粹いきな恰好で、ときどき銭ぜに函ばこを覗のぞいた。売上額ふが増え

ていると、「いらっしやアい」剃刀屋のときと違って掛声も勇ま

しかつた。俗に「おかま」という中性の流し芸人が流しに来て、
青柳あおやぎを賑にぎやかに弾いて行つたり、景気がよかつた。その代り、
土地柄が悪く、性質たちの良くない酒呑さけのみ同志が喧嘩をはじめたりし
て、柳吉はハラハラしたが、蝶子は昔とつた杵柄きねづかで、そんな客
をうまくさばくのおそに別に秋波をつかつたりする必要もなかつた。
廓をひかえて夜更おそくまで客があり、看板を入れる頃はもう東の空
が紫むらさきいろ色いろに変わつていた。くたくたになつて二階の四畳半で一いっ
刻きうとうとしたかと思うと、もう目覚ましがジジーと鳴つた。
寝巻のまま階段下に降りると、顔も洗わぬうちに、「朝食出来ま
す、四品付十八銭」の立看板を出した。朝帰りの客を当て込んで
味噌汁、煮豆、漬物つけもの、ご飯と都合四品で十八銭、細かい商売だ

と多寡たかをくくつていたところ、ビールなどをとる客もいて、結構商売になつたから、少々眠さも我慢出来た。

秋めいて来て、やがて風が肌寒はださむになると、もう関東煮屋に

「もつて来い」の季節で、ビールに代つて酒もよく出た。酒屋の払いもきちんきちんと現金で渡し、銘酒めいしゆの本舗ほんぽから、看板を寄贈ぞうしてやろうというくらいになり、蝶子の三味線も空しく押入れにしまつたままだった。こんどは半分以上自分の金を出したというせいばかりでもなかつたらうが、柳吉の身の入れ方は申分なかつた。公休日というものも設けず、毎日せつせと精出したから、無駄費むだづかいもないままに、勢い溜たまる一方だった。柳吉は毎日郵便局へ行つた。体のえらい商売だから、柳吉は疲れつかると酒で元気を

つけた。酒をのむと気が大きくなり、ふらふらと大金を使つてしまふ柳吉の性分を知っていたので、蝶子はヒヤヒヤしたが、売物の酒とあつてみれば、柳吉も加減して飲んだ。そういう飲み方も、しかし、蝶子にはまた一つの心配で、いずれはどちらへ廻つても心配は尽きなかつた。大酒を飲めば馬鹿に陽気になるが、チビチビやる時は元来吃りのせいか無口の柳吉が一層無口になつて、客のない時など、椅子いすに腰掛けてぼかんと何か考えごとしているらしい容子を見ると、やはり、梅田の家のこと考えてるのと違うやろか、そう思つて気が気でなかつた。

案の定、妹の婚礼に出席を撥ねつけられたとて柳吉は氣を腐くさらせ、二百円ほど持ち出して出掛けたまま、三日帰つて来なかつた。

ちようど花見時で、おまけに日曜、祭日と紋日もんびが続いて店を休むわけに行かず、てん手古舞いしながら二日商売をしたものの、蝶子はもう慾など出している気にもなれず、おまけに忙しいのと心配とで体が言うことを利かず、三日目はとうとう店を閉めた。その夜おそ更く、帰って来た。耳を澄すましていると、「今ごろは半七さんが、どこにどうしてござろうぞ。いまさら帰らぬことながら、わしというものないならば、半兵衛様はんべえもお通めんに免じ、子までなしたる三勝さんかつどのを、疾とくにも呼び入れさしやんしたら、半七さんの身持も直り、ご勘当もあるまいに……」と三勝半七のサワリを語りながらやって来るのは、柳吉に違いなかった。

夜中に下手な浄瑠璃を語ったりして、近所の体裁も悪いこつち

やと、ほつとした。「……お気に入らぬと知りながら、未練な私が輪廻りんねゆえ、そい臥ふしは叶かなわずとも、お傍そばに居たいと辛抱して、これまで居たのがお身の仇……」とこつちから後を続けてこましたるかという気持で、階下したへ降りた。柳吉の足音は家の前で止つた。もう語りもせず、気兼ねした容子で、カタカタ戸を動かさせているようだった。「どなたツ？」わざと言うと、「わいや」「わいでは分りまへんぜ」重ねてとぼけてみせると、「ここ維康や」と外の声は震ふるえていた。「維康いう人は沢山たんいたはります」にこりともせず言った。「維康柳吉や」もう蝶子の折檻を観念しているようだった。「維康柳吉という人はここには用のない人だす。今ごろどこぞで散財していやはりまっしやろ」となおも苛いじめにか

かつたが、近所の体裁もあつたから、そのくらいにして、戸を開けるなり、「おばはん、せせ殺せつしよう生せいやぜ」と顔をしかめて突つ立っている柳吉を引きずり込んだ。無理に二階へ押し上げると、柳吉は天井へ頭を打ぶつつけた。「痛ア！」も糞くそもあるもんかと、思う存分折檻した。

もう二度と浮気うわきはしないと柳吉は誓ちかつたが、蝶子の折檻は何の薬にもならなかつた。しばらくすると、また放蕩ほうとうした。そして帰るときは、やはり折檻おそを怖れて蒼くなつた。そろそろ肥満して来た蝶子は折檻するたびに息切れがした。

柳吉が遊蕩に使う金はかなりの額だったから、遊んだあくる日はさすがに彼も蒼くなつて、盞さかずきも手にしないで、黙々と鍋の中を

搔きまわしていた。が、四五日たつと、やはり、客の酒の爛かんをす
 るばかりが能やないと言ひ出し、混ぜない方の酒をたつぷり銚子
 に入れて、銅壺どうこの中へ浸つけた。明らかに商売に飽あいた風で、酔う
 と気が大きくなり、自然足は遊びの方に向いた。紺屋こうやの白袴しろばかま
 どころでなく、これでは柳吉の遊びに油を注ぐために商売をして
 いるようなものだ、蝶子はだんだん後悔した。えらい商売を始
 めたものやと思つているうちに、酒屋への支払いなども滞とどり勝ち
 になり、結局、やめるに若しかずと、その旨柳吉に言つと、柳吉は
 即座そくざに同意した。

「この店譲ります」と貼出はりだししたまま、陰気臭くずっと店を閉め

たきりだった。柳吉は浄瑠璃の稽古に通い出した。貯えの金も次第に薄くなつて行くのに、一向に店の買手がつかなかった。蝶子の肚はそろそろ、三度目のヤトナを考えていた。ある日、二階の窓から表の人通りを眺めていると、それが皆客に見えて、商売をしていないことがいかにも惜しかった。向い側の五六軒先にある果物屋が、赤や黄や緑の色が咲きこぼれていて、活気を見せた。客の出入りも多かつた。果物屋はええ商売やとふと思うと、もういても立つてもいられず、柳吉が浄瑠璃の稽古から帰つて来ると、早速「果物屋をやれへんか」柳吉は乗気にならなかつた。いよいよ食うに困れば、梅田へ行つて無心すれば良しと考えていたのだ。

ある日、どうやら梅田へ出掛けたらしかった。帰って来ての話に、無心したところ妹の聲が出て応待したが、話の分らぬ頑固者の上にけちんぼと来ていて、結局鏢びた一文も出さなかつたとしきりに興奮した。そして「果物屋をやるうやないか」顔はにがりきつていた。

関東煮の諸道具を売り払った金で店を改造した。仕入れや何やかやで大分金が足らなかつたので、衣裳や頭のものを買に入れ、なおおきんの所へ金を借りに行った。おきんは一時間ばかり柳吉の悪口を言ったが、結局「蝶子はん、あんたが可哀想やさかい」と百円貸してくれた。

その足で上塩町かみしおまちの種吉の所へ行き、果物屋をやるから、二三

日手を貸してくれと頼んだ。西瓜すいかの切り方など要領を柳吉は知らないから、経験のある種吉に教わる必要に迫せまられて、こんどは柳吉の口から「一つお父つあんに頼もうやないか」と言い出して、種吉は若い頃お辰の国元やまとの大和から車一台分の西瓜を買って、上塩町の夜店で切売りしたことがある。その頃、蝶子はまだ二つで、お辰が背負うて、つまり親娘おやこ三人総出で、一晩に百個売れたと種吉は昔話し、喜んで手伝うことを言った。関東煮屋のとき手伝おうと言って柳吉に撥ねつけられたことなど、根に持たなかつた。どころか店びらきの日、筋向いにも果物屋があるとて、「西瓜屋の向いに西瓜屋が出来て、西瓜同志（好いた同志）の差し向い」と淡海節たんかいぶしの文句を言い出すほどの上機嫌だった。向い側の

果物屋は、店の半分が氷店になっているのが強味で氷かけ西瓜で客を呼んだから、自然、蝶子たちは、切身の厚さで対抗しなければならなかった。が、言われなくても種吉の切り方は、すこぶる気前がよかった。一個八十銭の西瓜で十銭の切身何個と胸算用むなざんようして、柳吉がハラハラすると、種吉は「切身で釣つって、丸口で儲けるんや。損して得とれや」と言った。そして「ああ、西瓜や、西瓜や、うまい西瓜の大安売りや！」と派手な呼び声を出した。向い側の呼び声もなかなか負けていなかった。蝶子も黙っていられず、「安い西瓜だつせ」と金切り声を出した。それが愛嬌で、客が来た。蝶子は、鞆かばんのような財布を首から吊つるして、売り上げを入れたり、釣銭を出したりした。

朝の間、蝶子は廓の中へはいって行き軒のきごとに西瓜を売つてまわつた。「うまい西瓜だつせ」と言う声が吃びっくり驚するほど綺麗きれいなのと、笑う顔が愛嬌があり、しかも気性が粹でさっぱりしているのとがたまらぬと、娼妓達がひいきにしてくれた。「明日あしたも持つて来とくなはれや」そんな時柳吉が背にのせて行くと、「姐ねえちゃんは……？」ええ奥さんを持つてはると褒められるのを、ひと事のように聴き流して、柳吉は渋しぶい顔であつた。むしろ、むつつりして、これで遊べば滅茶苦茶に羽目を外す男だとは見えなかつた。

割合熱心に習つたので、四、五日すると柳吉は西瓜を切る要領など覚えた。種吉はちようど氏神の祭で例年通りお渡りの人足に雇われたのを機会しおに、手を引いた。帰りしな、林檎りんごはよくよくふ

きんで拭ふいて艶つやを出すこと、水蜜桃すいみつとうには手を触れぬこと、果物は埃ほこりをきらうゆえ始終掃塵はたきをかけることなど念押しして行つた。その通りに心掛けていたのだが、どういふものか足が早くて水蜜桃など瞬まく間に腐敗ふはいした。店へ飾かざっておけぬから、辛い気持で捨てた。毎日、捨てる分が多かつた。といつて品物を減らすと店が貧相になるので、そうも行かず、巧はく捌はけないと焦あせりが出た。儲も多いが損も勘定にいれねばならず、果物屋も容易な商売ではないと、だんだん分つた。

柳吉にそろそろ元気がなくなつて来たので、蝶子はもう飽いたのかと心配した。がその心配より先に柳吉は病氣になつた。まゑ

まえから胃腸が悪いと二ツ井戸の実費医院へ通い通いしていたが、
こんどは尿にように血がまじって小便するのにたつぷり二十分かかるな
ど、人にも言えなかつた。前に怪あやしい病気に罹かかり、そのとき蝶子
は「なんちう人やろ」と怒おこりながらも、まじないに、屋根瓦やねがわらに
へばりついている猫ねこの糞ふんと明みよう礬ばんを煎せんじてこつそり飲ませたと
ころ効目ききめがあつたので、こんどもそれだと思つて、黙つて味噌汁
の中に入れると、柳吉は啜すすつてみて、変な顔をしたが、それと氣
付かず、味の妙なのは病氣のせいだと思つたらしかつた。氣が付
かねば、まじないは効くのだとひそかに現げんのあらわれるのを待つ
ていたところ更さらに効目はなかつた。小便の時、泣き声を立てるよ
うになり、島の内の華陽堂病院が泌尿科ひにようか専門なので、そこで

診みてもらおうと、尿道に管を入れて覗いたあげく、「膀ぼうこう胱こうが悪い」十日ばかり通ったが、はかばかしくならなかった。みるみる瘦やせて行った。診立て違いということもあるからと、天王寺てんのうじの市民病院で診てもらおうと、果して違っていた。レントゲンをかけ腎じんぞ臓うけつかく結核かくだときまると、華陽堂病院が恨うらめしいよりも、むしろなつかしかつた。命が惜しければ入院しなさいと言われた。あわてて入院した。

附添いのため、店を構っていられなかったの、蝶子はやむなく、店を閉めた。果物が腐って行くことが残念だったから、種吉に店の方を頼もうと思つたが、運の悪い時はどうにも仕様のないもので、母親のお辰が四、五日まえから寝付いていた。子宮癌しきゅうがん

このことだった。金光教こんこうきょうに凝こつて、お水をいただいたりして
いるうちに、衰すい弱じやくがはげしくて、寝付いた時はもう助からぬ
状態だと町医者まちいしやは診た。手術をするにも、この体ではと医者は気
の毒がったが、お辰の方から手術もいや、入院もいやと断った。
金のこともあった。注射もはじめはきらったが、体が二つに割れ
るような苦痛が注射で消えてとろとろと気持よく眠り込んでしま
える味を覚えると、痛みよりも先に「注射や、注射や」夜中でも
構わず泣き叫んで、種吉を起した。種吉は眠い目をこすって医者
の所へ走った。「モルヒネだからたびたびの注射は危険だ」と医
者は断るのだが、「どうせ死しによる体ですよつて」と眼をしばた
いた。弟の信一は京都下鴨しもがもの質屋へ年奉公していたが、いざ

という時が来るまで、戻れと言わぬことにしてあった。だから、種吉の体は幾つあつても足らぬくらいで、蝶子も諦め、結局病院代も要るままに、店を売りに出したのだ。

こればかりは運よく、すぐ買手がついて、二百五十円の金がいだったが、すぐ消えた。手術と決つてはいたが、手術するまえに体に力をつけておかねばならず、舶来はくらいの薬を毎日二本ずつ入れた。一本五円もしたので、怖いほど病院代は嵩んだのだ。蝶子は派出婦を雇つて、夜の間だけ柳吉の看病してもらい、ヤトナに出ることにした。が、焼石に水だった。手術も今日、明日に迫り、金の要ることは目に見えていた。蝶子の唄もこんどばかりは昔の面影おもかげを失うた。赤電車での帰り、帯の間に手を差し込んで、思

案を重ねた。おきんに借りた百円もそのままだった。

重い足で、梅田新道の柳吉の家を訪れた。養子だけが会おうてくれた。たくさんとは言いませんがと畳に頭をすりつけたが、話にならなかつた。自業自得じごうじとく、そんな言葉も彼は吐はいた。「この家の身代は僕が預っているのです。あなた方に指一本……」差ししてもraithくはないのはこつちのことですと、尻しりを振つて外へ飛び出したが、すぐ気の抜けた歩き方になつた。種吉の所へ行き、お辰のびようしよう病びようしよう床を見舞うと、お辰は「私わてに構かまわんと、はよ維康さんところへ行つたりいな」そして、病気ではご飯たたきも不自由ふじゆうやろから、家で重湯じゆうとうやほうれん草炊たいて持つて帰れと、お辰は気持も仏様のようになつており、死期に近づいた人に見えた。

お辰とちがって、柳吉は蝶子の帰りが遅いと散々叱言を言う始末で、これではまだ死ぬだけの人間になつていかなかった。という訳でもなかったろうが、とにかく二日後に腎臓を片一方切り取つてしまうという大手術をやつても、ピンピン生きて、「水や、水や、水をくれ」とわめき散らした。水を飲ましてはいけぬと注意されていたので、蝶子は丹田たんでんに力を入れて柳吉のわめき声を聴いた。

あくる日、十二三の女の子を連れて若い女が見舞に來た。顔かたちを一目見るなり、柳吉の妹だと分つた。はつと緊張きんちようし、「よう来てくれはりました」初対面の挨拶代りにそう言つた。連れて來た女の子は柳吉の娘だつた。ことし四月から女学校に上つ

ていて、セーラー服を着ていた。頭を撫なでると、顔をしかめた。

一時間ほどして帰って行つた。夫に内緒で来たと言つた。「あんな養子にき、き、気兼ねする奴があるか」妹の背中へ柳吉はそんな言葉を投げた。送つて廊下ろうかへ出ると、妹は「姉ねえはんの苦勞はお父さんもこの頃よう知つたはりまつせ。よう尽してくれとる、こない言うたはります」と言い、そつと金を握らした。蝶子は白お粉しろいけ気もなく、髪もバサバサで、着物はくたびれていた。そんなところを同情しての言葉だったかも知らぬが、蝶子は本真ほんまのことと思ひかたつた。柳吉の父親に分つてもらうまで十年掛つたのだ。姉さんと言われたことも嬉しかつた。だから、金はいつたん戻す気になつた。が無理に握らされて、あとで見ると百円あつた。有

難かった。そわそわして落ちつかなかった。

夕方、電話が掛つて来た。弟の声だったから、ぎよつとした。
危篤だきとくと聞いて、早速駆けつける旨、電話室から病室へ言いに戻ると、柳吉は「水くれ」を叫んでいた。そして、「お、お、お、お、親が大事か、わいが大事か」自分もいつ死ぬか分らへんと、そんな風にとれる声をうなり出した。蝶子は椅子に腰掛けて、じつと腕組みした。そこへ涙が落ちるまで、大分時間があつた。秋で、病院の庭から虫の声もした。

どのくらい時間が経つたか、隙間風が肌寒くすつかり夜になつていた。急に、「維康さん、お電話でつせ」胸さわぎしながら電話口に出てみると、こんどは誰か分らぬ女の声で、「息を引きと

らはりましたぜ」とのことだった。そのまま病院を出て駆けつけた。「蝶子はん、あんたのこと心配して蝶子は可哀想なやつちや言うて息引きとらはったんでつせ」近所の女達の赤い目がこれ見よがしだった。三十歳の蝶子も母親の目から見れば子供だと種吉は男泣きした。親不孝者と見る人々の目を背中に感じながら、白い布を取って今更の死しにみず水を唇につけるなど、蝶子は勢せい一杯いっぱいに振舞った。「わての亭主も病氣や」それを自分の肚への言訳にして、お通つや夜も早々に切り上げた。夜更けの街を歩いて病院へ帰る途々みちみち、それでもさすがに泣きに泣けた。病室へはいるなり柳吉は怖い目で「どこイ行って来たんや」蝶子はたった一言、「死んだ」そして二人とも黙り込んで、しばらくは睨み合っていた。柳

吉の冷やかな視線は、なぜか蝶子を^{あつぱく}圧迫した。蝶子はそれに負けまいとして、持前の勝気な気性が蛇のように頭をあげて来た。柳吉の妹がくれた百円の金を全部でなくとも、たとえ半分だけでも、母親の葬式の費用に当てようと、ほとんど気がきまった。まよ、せめてもの親孝行だと、それを柳吉に言い出そうとしたが、痩せたその顔を見ては言えなかつた。

が、そんな心配は要らなかつた。種吉がかねがね駕籠かき人足に雇われていた葬儀屋^{そうぎや}で、身内のものだとて無料で葬儀万端を引き受けてくれて、かなり盛^{せいたい}大に葬式が出来た。おまけにお辰がいつの間にはいつていたのか、こっそり郵便局の簡易養老保険に一円掛けではいつていたので五百円の保険料が流れ込んだのだ。

上塩町に三十年住んで顔が広かつたからかなり多かつた会葬者に市電のパスを山菓子に出し、香奠返こうでんがえしの義理も済ませて、なお二百円ばかり残つた。それで種吉は病院を訪ねて、見舞金だと百円だけ蝶子に渡した。親のありがたさが身に沁しみた。柳吉の父が蝶子の苦勞を褒めていると妹に聞いた旨言うと、種吉は「それえ按配や」と、お辰が死んで以来はじめてのニコニコした顔を見せた。

柳吉はやがて退院して、湯崎温泉へ出で養生ようじょうした。費用は蝶子がヤトナで稼いで仕送りした。二階借りするのも不経済だったから、蝶子は種吉の所で寝泊りした。種吉へは飯代を渡すことにしたのだが、種吉は水臭いといって受取らなかつた。仕送りに追わ

れていることを知っていたのだ。

蝶子が親の所へ戻っていると知って、近所の金持から、妾になれと露骨ろこつに言つて来た。例の材木屋の主人は死んでいたが、その息子が柳吉と同じ年の四十一になっていて、そこからも話があった。蝶子は承りおくといい顔をした。きっぱり断らなかつたのは近所の間柄気まなごずくならぬように思ったためだが、一つには芸者時代の駄引きの名残りなごだった。まだまだ若いのだとそんな話のたびに、改めて自分を見直した。が、心はめつたに動きはしなかつた。湯崎にいる柳吉の夢ゆめを毎晩見た。ある日、夢見が悪いと氣にして、とうとう湯崎まで出掛けて行つた。「毎日魚釣りをして淋しく暮している」はずの柳吉が、こともあろうに芸者を揚げて散

財していた。むろん酒も飲んでいた。女中を捉とらえて、根掘り聴くとここ一週間余り毎日のことだという。そんな金がどこからはいるのか、自分の仕送りは宿の払いに精一杯で、煙草代たばこだいにも困るだろうと済まぬ気がしていたのにと不審ふしんに思った。女中の口から、柳吉がたびたび妹に無心していたことが分ると目の前が真暗になった。自分の腕一つで柳吉を出養生させていればこそ、苦勞の仕し甲斐がいもあるのだと、柳吉の父親の思惑おもわくをも勘定に入れてかねがね思っていたのだ。妹に無心などしてくれたばかりに、自分の苦勞も水の泡あわだと泣いた。が、何かにつけて蝶子は自分の甲斐性の上にどっさり腰を据えると、柳吉はわが身に甲斐性がないだけに、その点がほとほと虫好かなかつたのだ。しかし、その甲斐性

を散々利用して来た手前、柳吉には面と向つては言いかえす言葉はなかつた。興ざめた顔で、蝶子の詰問きつもんを大人しく聴いた。なお女中の話では、柳吉はひそかに娘を湯崎へ呼び寄せて、千畳敷や三段壁など名所を見物したとのことだった。その父性愛も柳吉の年になってみるともっともだったが、裏切られた気がした。かねがね娘を引きとつて三人暮しをしようとして柳吉に迫つたのだが、柳吉はうんと言わなかつたのだ。娘のことなどどうでも良い顔で、だからひそかに自分に己惚うぬぼれていたのだった。何やかやで、蝶子は逆上した。部屋のガラス障子さかざきに盞さんを投げた。芸者達はこそこそと逃げ帰った。が、間もなく蝶子は先刻の芸者達を名指しで呼んだ。自分ももと芸者であつたからには、不粹なことで人気商売の

芸者にケチをつけたくないと、そんな思いやりとも虚栄心とも分らぬ心が辛うじて出た。自分への残酷めいた快感もあった。

柳吉と一緒に大阪へ帰って、日本橋の御蔵跡公園裏に二階借りした。相変らずヤトナに出た。こんど二階借りをやめて一戸構え、ちゃんとした商売をするようになれば、柳吉の父親もえらい女だと褒めてくれ、天下晴れての夫婦になれるだろうとはげみを出した。その父親はもう十年以上も中風で寝ていて、普通ならとつくに死んでいるところを持ちこたえているだけに、いつ死なぬとも限らず、眼の黒いうちにと蝶子は焦った。が、柳吉はまだ病後の体で、滋養剤を飲んだり、注射を打ったりして、そのため

きびしい物入りだったから、半年経つても三十円と纏まった金はたまらなかつた。

ある夕方、三味線のトランクを提げて日本橋一丁目の交叉点こうさてんで乗換のりかえの電車を待っていると、「蝶子はんと違いまつか」と話しかけられた。北の新地で同じ抱主の所で一つ釜の飯を食つていた金八という芸者だった。出世しているらしいことはシヨール一つにも現われていた。誘われて、戎えびす橋ばしの丸方でスキ焼をした。その日の稼ぎをフイにしなければならぬことが気になったが、出世している友達の手前、それと言って断ることは気がひけたのだ。抱主がけちんぼで、食事にも塩鱈一尾びという情けなさだったから、その頃お互い出世して抱主を見返してやろうと言ひ合つたものだ。

と昔話が出ると、蝶子は今の境きょうぐう遇ぐが恥かしかつた。金八は蝶子の駈落ち後間もなく落籍ひかされて、鉦山師の妾となつたが、ついでこの間本妻が死んで、後釜に据えられ、いまは鉦山の売り買いに口出しして、「言うちや何やけど……」これ以上の出世も望まぬほどの暮しをしている。につけても、想い出すのは、「やつぱり、蝶子はん、あんたのことや」抱主を見返すと誓つた昔の夢を実現するには、是非蝶子にも出世してもらわねばならぬと金八は言つた。千円でも二千円でも、あんたの要るだけの金は無利子の期間なしで貸すから、何か商売する気はないかと、事情を訊くなり、早速言つてくれた。地獄で仏とはこのことや、蝶子は泪が出て改めて、金八が身につけるものを片かたツ端はしから褒めた。「何商売がよ

ろしおまつしやろか」言葉使いも丁寧ていねいだった。「そうやなア」丸万を出ると、歌舞伎かぶきの横で八卦見に見てもらった。水商売がよろしいと言われた。「あんたが水商売でわては鉾山やま商売や、水と山とで、なんぞこんな都々逸どどいつないやろか」それで話はきっぱり決った。

帰って柳吉に話すと、「お前もええ友達持つてるなア」とちよつぱり皮肉めいた言い方だったが、肚の中では万まんざら更でもないらしかった。

カフェを経営することに決め、翌日早速周旋屋を覗きまわって、カフェの出物でものを探した。なかなか探せぬと思っていたところ、いくらでも売物があり、盛業中のものもじゃんじやん売りに出てい

るくらいで、これではカフェ商売の内幕もなかなか楽ではなさそうだと二の足を踏んだが、しかし蝶子の自信の方が勝った。マダムの腕一つで女給の顔触れが少々悪くても結構流行はやらして行けると意気込んだ。売りに出ている店を一軒一軒廻つてみて、結局下寺町電停前の店が二ツ井戸から道頓堀、千日前へかけての盛り場に遠くない割に値段も手頃で、店の構えも小ぢんまりして、趣味かなに適つているとて、それに決めた。造作附八百円で手を打ったが、飛田の関東煮屋のような腐った店と違うから安い方であった。念のため金八に見てもらおうと、「ここならわても一ぺん遊んでみたい」と文句はなかつた。そして、代替りゆえ、思い切つて店の内外を改かいそう装し、ネオンもつけて、派手に開店しなはれ、金はいく

らでも出すと、随分乗気になってくれた。

名前は相変らずの「蝶柳」の上にサロンをつけて「サロン蝶柳」とし、蓄音器ちくおんきは新内、端唄はうたなど粹向きなのを掛け、女給はすべて日本髪か地味なハイカラの娘こばかりで、下手へたに洋装した女や髪ちぢの縮れた女などは置かなかつた。バーテンというよりは料理場とといった方が似合うところで、柳吉はなまこの酔の物など附出つきだしの小鉢物を作り、蝶子はしきりに茶屋風の愛嬌を振りまいた。すべてこのように日本趣味で、それがかえって面白いと客種も良く、コーヒーだけの客など居辛かつた。

半年経たぬうちに押しも押されぬ店となった。蝶子のマダム振りも板についた。使ってくれと新しい女給が「顔見せ」に来れば

頭のとつぺんから足の先まで素早く一目の観察で、女の素すじ姓ようや腕が見抜けるようになった。ひとり、どうやら臭いと思われる女給が来た。体つき、身のこなしなど、いやらしく男の心をそそるようすわで眼つきも据すわつていて、気が進まなかつたが、レットル（顔）が良いので雇い入れた。べたべたと客にへばりつき、ひそひそ声の口説くぜつも何となく蝶子には氣にくわなかつたが、良い客が皆その女についてしまったので、追い出すわけには行かなかつた。時々、二、三時間暇をくれといって、客と出て行くのだった。そんなことがしばしば続いて、客の足が遠のいた。てつきりどこかへ客を食わえ込むらしく、客も馴染みになるとわざわざ店へ出向いて来る必要もなかつたわけだ。そのための家を借りてあることもあと

で分った。いわばカフェを利用して、そんな妙な事をやっていたのだ。追い出したところ、他の女給たちが動揺どうようした。ひとりひとり当ってみると、どの女給もその女を見習って一度ならずそんな道に足を入れているらしかった。そうしなければ、その女に自分らの客をとられてしまつてやつて行けなかつたのかも知れぬが、とにかく、蝶子はぞつと嫌気いやけがさした。その筋に分つたら大変だと、全部の女給に暇を出し、新しく温和おとなしい女ばかりを雇い入れた。それでやつと危機を切り抜けた。店で承知でやらすならともかく、女給たちに勝手にそんな真似をされたら、もうそのカフェは駄目になると、あとで前例も聞かされた。

女給が変ると、客種も変り、新聞社関係の人がよく来た。新聞

記者は眼つきが悪いからと思ったほどでなく、陽気に子供じみて、蝶子と呼ぶにもマダムでなくて「おばちゃん」蝶子の機嫌はすこぶる良かった。マスターこと「おっさん」の柳吉もボツクスに引き出されて一緒に遊んだり、ひどく家庭的な雰^{ふん}囲^{いき}気の店になった。酔うと柳吉は「おい、こら、らつきよ」などと記者の渾名を呼んだりし、そのあげく、二次会だと連中とつるんで今里新地へ車を飛ばした。蝶子も客の手前、粹をきかして笑っていたが、泊つて来たりすれば、やはり折檻の手はゆるめなかった。近所では蝶子を鬼^{おに}婆^ばと蔭口たたいた。女給たちには面白い見もので、マスターが悪いと表面では女同志のひいきもあつたが、しかし、肚の中ではどう思っているか分らなかった。

蝶子は「娘さんを引き取ろうや」とそろそろ柳吉に持ちかけた。柳吉は「もうちよつと待ちいな」と言い逃れ^{のが}めいた。「子供が可愛いことないのんか」^{ないはずはなかつたが、娘の方で来たがらぬのだった。}女学生の身でカフェ商売を恥じるのは無理もなかつたが、理由はそんな簡単なものだけではなかつた。父親を悪い女に奪^とられたと、死んだ母親は暇さえあれば、娘に言い聴かせていたのだ。蝶子が無理にとせがむので、一、二度「サロン蝶柳」へセーラー服の姿を現わしたが、にこりともしなかつた。蝶子はおかしいほど機嫌とつて、「英語たらいもうもんむつかしおまつしやるな」女学生は鼻で笑うのだった。

ある日、こちらから頼みもしないのにだしぬけに白い顔を見せた。蝶子は顔じゆう皺しわだらけに笑つて「いらつしやい」駆け寄つたのへつんと頭を下げるなり、女学生は柳吉の所へ近寄つて低い声で「お祖父じいさんの病気が悪い、すぐ来て下さい」

柳吉と一緒に駆けつける事にしていた。が、柳吉は「お前は家に居おりいな。いま一緒に行つたら都合ぐっが悪い」蝶子は気抜けした気持でしばらく呆然ぼうぜんとしたが、これだけのことは柳吉にくれぐれも頼んだ。——父親の息のある間に、枕元で晴れて夫婦になれるよう、頼んでくれ。父親がうんと言つたらすぐ知らせてくれ。飛んで行くさかい。

蝶子は呉服屋へ駆け込んで、柳吉と自分と二人分の紋附を大急

ぎで拵こしらえるように頼んだ。吉報きつぽうを待っていたが、なかなか来なかつた。柳吉は顔も見せなかつた。二日経ち、紋附も出来上つた。四日目の夕方呼出しの電話が掛つた。話がついた、すぐ来いの電話だと顔を紅潮させ、「もし、もし、私維康です」と言うと、柳吉の声で「ああ、お、お、お、おばはんか、親爺は今死んだぜ」

「ああ、もし、もし」蝶子の声は癩かんだか高く震ふるえた。「そんなら、私はすぐそっちイ行きまっさ、紋附も二人分出来てまんねん」足元がぐらぐらしながらも、それだけははつきり言った。が、柳吉の声は、「お前は来ん方がええ。来たら都合ぐっ悪い。よ、よ、よ、よ、養子が……」あと聞かなかつた。葬式にも出たらいかんて、そんな話があるもんかと頭の中を火が走つた。病院の廊下で柳吉の妹

が言った言葉は嘘だったのか、それとも柳吉が頑固な養子にまるめ込まれたのか、それを考える余裕もなかった。紋附のことが頭にこびりついた。店へ帰り二階へ閉じ籠った。やがて、戸を閉め切つて、ガスのゴム管を引っぱり上げた。「マダム、今夜はスキ焼でつか」階下から女給が声かけた。栓をひねった。

夜、柳吉が紋附をとりて帰つて来ると、ガスのメーターがチンチンと高い音を立てていた。異様な臭気がした。驚いて二階へ上り、戸を開けた。団扇でパタパタそこらをあおった。医者を呼んだ。それで蝶子は助かった。新聞に出た。新聞記者は治に居て乱を忘れなかったのだ。日蔭者自殺を図るなどと同情のある書き方だった。柳吉は葬式があるからと逃げて行き、それきり戻つて

来なかつた。種吉が梅田へ訊ねたずに行くと、そこにもいないらしかつた。起きられるようになって店へ出ると、客が慰めてくれて、よく流行はやつた。妾になれと客はさすがに時機を見逃さなかつた。毎朝、かなり厚化粧してどこかへ出掛けて行くので、さては妾になつたのかと悪評だつた。が本当は、柳吉が早く帰るようにと金光教の道場へお詣りしていたのだつた。

二十日余り経つと、種吉のところへ柳吉の手紙が来た。自分ももう四十三歳だ、一度大患たいかんに罹かかつた身ではそう永くも生きられない。娘の愛にも惹ひかされる。九州の土地でたとえ職工をしてでも自活し、娘を引き取つて余生を暮したい。蝶子にも重々気の毒だが、よろしく伝えてくれ。蝶子もまだ若いからこの先……など

とあつた。見せたらことだと種吉は焼き捨てた。

十日経ち、柳吉はひよつくり「サロン蝶柳」へ戻つて来た。行方を晦くらましたのは策戦や、養子に蝶子と別れたと見せかけて金を取る肚やった、親爺が死ねば当然遺産の分け前に与あずからねば損や、そう思て、わざと葬式にも呼ばなかつたと言つた。蝶子は本当だと思つた。柳吉は「どや、なんぞ、う、う、うまいもん食いに行こか」と蝶子を誘つた。法善寺境内の「めおとぜんざい」へ行つた。道頓堀からの通路と千日前からの通路の角に当つているところに古びた阿多福人形おたふくにんぎようが据えられ、その前に「めおとぜんざい」と書いた赤い大提灯おおぢようちんがぶら下つているのを見ると、しみじみと夫婦で行く店らしかつた。おまけに、ぜんざいを註文ちゆうもんすると、

めおと
女夫の意味で一人に二杯ずつ持つて来た。碁盤ごばんの目の敷畳に腰を
かけ、スウスウと高い音を立てて啜すすりながら柳吉は言つた。「こ、
こ、ここの善哉ぜんざいはなんで、二、二、二杯ずつ持つて来よるか知
つてるか、知らんやろ。こら昔何とか大夫だゆうちう浄瑠璃のお師匠は
んがひらいた店でな、一杯山やまもり盛にするより、ちよつとずつ二杯
にする方が沢山ぎようさんはいつてるように見えるやろ、そこをうまいこと
考えよつたのや」蝶子は「一人より女夫の方がええいうことでつ
しやろ」ぽんと襟を突き上げると肩が大きく揺れた。蝶子はめつ
きり肥えて、その座蒲団が尻にかくれるくらいであつた。

蝶子と柳吉はやがて浄瑠璃に凝こり出した。二ツ井戸天牛書店の

二階広間で開かれた素義大会で、柳吉は蝶子の三味線で「太^{たいしじゆ}十^う」を語り、二等賞を貰った。景品の大きな座蒲団は蝶子が毎日使った。

(昭和十五年八月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 織田作之助」筑摩書房

1993（平成5）年5月20日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学大系70」筑摩書房

1970（昭和45）年

初出：「海風」

1940（昭和15）年4月

※1940（昭和15）年7月、「文芸」改造社に再録。

入力：野口英司

校正：江戸尚美

1998年3月12日公開

2008年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夫婦善哉

織田作之助

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>